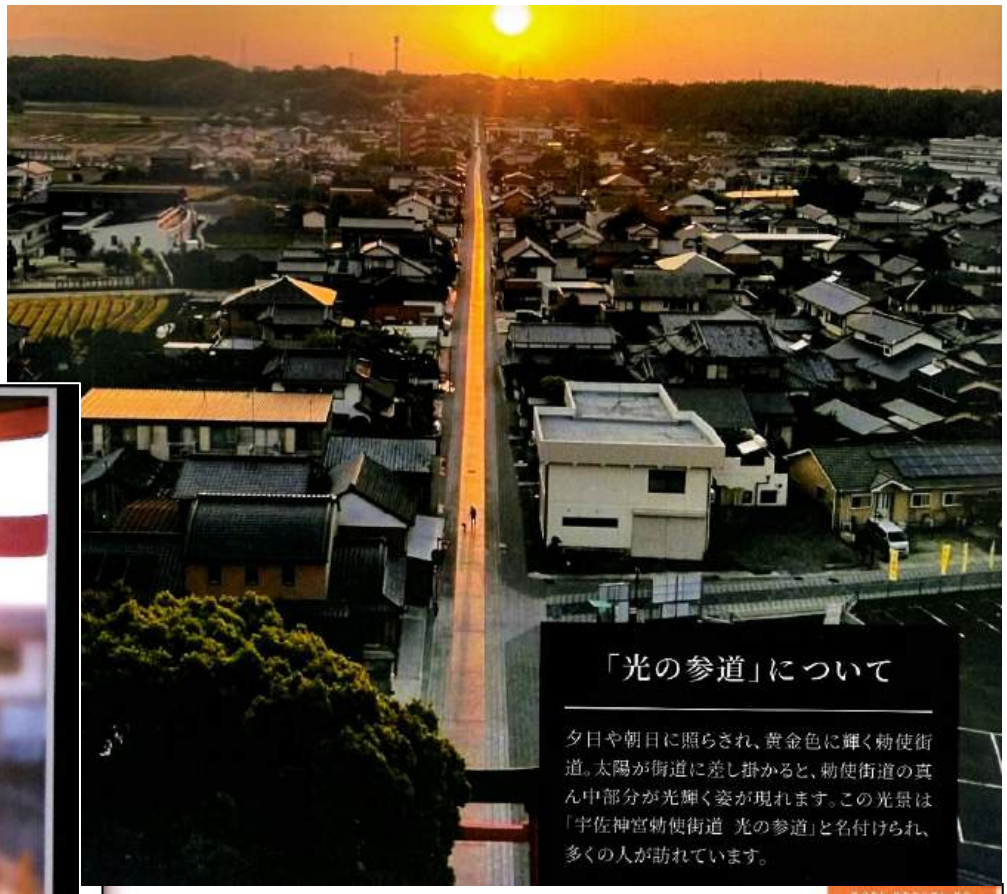
この連載のテーマ、つつうらうら（津々浦々）という四字熟語は、「あちこちから、隅から隅まで」という意味です。
日本は島国で、海岸線に津や浦のついた地名が多くあります。古代、津は大きい港を表し、浦は小さい港を表したといわれています。津々浦々を辿べば、いわゆる隅から隅までと言う意味で、津々浦々が生まれました。そこで「いろいろなところをご紹介する」という気持ちを込めました。

著者 森恵 Megumi Mori

RKB毎日放送スッピーキャスタードライバー（1993年～1997年）福岡県、佐賀県、大分県、山口県の放送局でAM、FMラジオパーソナリティ、TVリポーターなど担当する。現在は、イベント司会者、ライター編集者、アナウンス&セミナー講師、歴史講座講師をしている。



「光の参道」について

夕日や朝日に照らされ、黄金色に輝く勅使街道。太陽が街道に差し掛かると、勅使街道の真ん中部分が光輝く姿が現れます。この光景は「宇佐神宮勅使街道 光の参道」と名付けられ、多くの人が訪れています。

太陽と参道が一直線に並ぶ時期

① 4月29日頃　② 8月10日頃

※ 年よって日にちは、前後します

NORI MEGUMI NO TSUTSU URARA

第23回

宇佐神宮③

2016年4月に取材しました

宇佐神宮には、神武天皇に関係の深い一柱騰宮といわれるところがあります。

日本書紀の中に、宇佐にまつわる内容が記されています。このことから、大変歴史が古いということがわかります。宇佐には一柱騰宮といわれる場所があり、一柱騰宮については、日本書紀に「日向から奈良の橿原に向かう神武天皇の船団が宇佐に立ち寄った時に、菟狭津彦・菟狭津媛が宇佐の川上に一柱騰宮を造ってもてなした」といったことが記されています。この一柱騰宮は宇佐市内に伝承（比定）として三ヶ所あります。一ヶ所目は宇佐神宮の呉橋の南の高台（この一帯を騰隈と呼ぶ）、二ヶ所目は和尚山花立池の側、三ヶ所目は宇佐市安心院町の妻垣神社にあるといわれています。日本書紀をたどりながらそのゆかりの地をご紹介します。

現在の一柱騰宮跡

＊日本書紀……養老4（720）年に出来上がった日本初（日本最古）の正史。

日本書紀をたどる①

～日本書紀 巻第三 神武天皇（即位前記甲寅年10月）～

迎水之門に着いたときに、一人の漁師がいて小舟に乗って近づいてきた。天皇はこれをお召しになり、そして問うて「お前は誰か」と仰せられた。答えて「私は国神で珍彦と申します。曲浦で魚釣りをしております」と申し上げた。天皇は勅して「お前は私のために先導をしてくれるか」と仰せられた。答えて「ご先導いたしましょう」と申し上げた。天皇は勅して、漁師に椎竿の先を差し渡して掴まえさせ、皇船に引き入れて水先案内とされ、とくに椎根津彦という名をちえられた。

日本書紀をたどる②

そしてそこから進んで菟狭の田の菟狭に到着された。（菟狭は地名である。ここではウサという）時に、菟狭国造の祖がいた。名を菟狭津彦・菟狭津媛という。その者が菟狭川の川上に一柱騰宮を造って、ご種走を差し上げた。この時、天皇は勅して、菟狭津媛を宇佐の天神了命に娶せられた。大神了命は中臣氏（のちの藤原氏）の遠祖である。

『一柱騰宮 あしひとつあがりのみや』

❶宇佐神宮の呉橋の南の高台

❷和尚山花立池の側

❸妻垣神社（宇佐神宮・摂社）

～宇佐市安心院町～

磐座信仰

妻垣神社は上社・下社の2社からなっている。下社とは、現在の社殿を備えた社で、上社とは、社殿東南の共鳴山の山頂近くに残る磐座を信仰対象の聖地とするもので、これが当社本来の原姿と思われる。この上社・下社は山宮・里宮とも呼ばれ、古く、山中にある磐座などを神の依代として奉祀していた山宮（社殿を持たないのが普通）を、時代が下り麓の村里が成長するにつれて、身近な山麓に勧請して建てた社殿が里宮で、神社の古い形態とされる。

散策リポート ～妻垣～

町指定史跡 妻垣神社奥宮巨石